

農業と科学

1986
2

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO LTD

60年度農業観測

修正見通しの概要

農林水産大臣官房調査課

田村 修一

以下は、昨年12月26日に農林水産省が公表した「昭和60年度農業観測修正見通し」のあらましである。

1 国内経済

60年度に入ってから我が国経済は、物価が引き続き安定して推移する中で、輸出が高水準を維持し、設備投資は着実な増加を続け、個人消費も緩やかながら着実に増加するなど、景気は全体として拡大を続けてきた。しかし、最近、輸出の伸びが鈍化し、鉱工業生産が一進一退を続け、雇用情勢の改善が足踏みしているなどの動きがみられる。また、60年度を通じての実質成長率は、政府見通しによれば4.2%程度の伸びと見込まれている。

2 農業資材

農業生産資材の農村価格は、上期では1.6%安となった。下期については、円相場の動向等にもよるが、卸売物価が引き続き落ち着いた動きを示していることや、海外原材料価格も総じて安定した動きを示していることから農村価格は弱含みに推移し、年度間では1~3%程度下回ると見込まれる。

表-1 昭和60年度農業観測修正見通し総括表

区 分	対前年度増減 (▲)率 (%)		60年度見通し(前年度対比)	
	58年度	59年度	当 初	修 正
実質飲食費支出	0.7	1.8	わずかに増加	わずかに増加
農業生産	0.7	4.8	1%程度減少	1%程度増加
農産物価格	2.2	0.4	わずかに下回る	わずかに下回る
農業生産資材価格	▲0.5	0.3	0~2%程度下回る	1~3%程度下回る

主要資材の下期の農村価格については、

①農業機械については、原材料価格の安定等を反映して落ち着いて推移するとみられる。

②肥料料については、60肥料年度の生産業者販売価格が5年ぶりに平均1.58%引き上げられたこともあって強含みで推移するとみられる。

③農薬については、60原材料価格の安定等を反映して61農業年度の製造業者販売価格(60年12月~61年11月の間適用)がほぼ据置きとされたことから横ばい傾向で推移するとみられる。

③飼料については、配合飼料の農家渡し価格が、飼料穀物の国際価格の低下等から10月に約4%引き下げられ、さらに61年1月には、円相場が円高傾向を強めたことなどから約4%引き下げられた。このため、下期も弱含みで推移すると見込まれる。

3. 農産物需要

上期の食料消費は、実収入にやや増加のきざしがみられるものの、1人当たり実質食料費支出でみると前年同期並みにとどまった。

下期については、個人消費支出が引き続き緩やかに増加すると見込まれ、食料品消費者価格も前年度の上昇率を下回るわずかな上昇にとどまると見込まれるものの、上期の実質食料費支出の動向等からみて食料費支出の大きな伸びは期待できないとみられる。このようなことから実質飲食費支出の伸びは、前年度程度のわずかな伸びになるものと見込まれ、農産物需要も緩やかな増加になると見込まれる。

4. 農産物供給

国内農業生産については、

①耕種生産は、米が天候に恵まれ、作柄が「やや良」となり、前年度をわずかに下回る程度にとどまったほか、果実、麦類等が増加し、全体ではほぼ前年度並みと見込まれる。

②繭の生産は、養蚕農家、桑栽培面積の減少などから6%の減少となった。

③畜産生産は、豚、ブロイラー等が増加し、全体では3～5%程度増加すると見込まれる。

以上のことから、農業生産総合は、総じて豊作となった前年度をさらに1%程度上回ると見込まれる。

また、農産物輸入については、上期では、飼料穀物等は増加したものの、生鮮果実、麦類等が減少し、全体では0.1%減となった。下期については、飼料穀物が引き続き増加するほか、大豆も増加するとみられるものの、食肉等は減少し、年度間の農産物全体では、前年度並みないしわずかに増加すると見込まれる。

5. 農産物生産者価格

上期の農産物生産者価格は、いも類、繭、畜産物は下回ったものの、果実、花き、野菜等が上回り、全体では3.7%の上昇となった。

下期については、

①畜産物は、鶏卵がわずかにいしやや、肉用牛がわずかにそれぞれ上回り、生乳は前年同期並みないしわずかに下回り、ブロイラーはわずかに、肉豚はかなりの程度それぞれ下回ると見込まれる。

②果実は、生産の増加を反映し、みかんは大幅に、りんごはかなり、それぞれ下回ると見込まれる。

③秋冬野菜は、たまねぎは大幅に下回るものの、その他は生産が減少し、全体ではかなり上回ると見込まれる。

また、行政価格については、米麦の政府買入価格、ばれいしょ、大豆の基準価格はいずれも据え置かれた。

以上のことから、60年度の農産物生産者価格（総合）はわずかに下回ると見込まれる。

6. 農家経済

60年度の農家経済についてみると、農業所得については、農業粗収益が、前年度大きく増加した稲作収入のわずかな減少はあるものの、畜産収入がわずかに増加することなどからほぼ前年度並みと見込まれる。一方、農業経営費面では、農業生産資材の農村価格は前年を下回るとみられるものの、資材の投入はわずかな増加とみられ、固定資産の償却費もかなりの程度増加するとみられることから、全体ではわずかに増加すると見込まれる。このため、全国1戸当たり平均の農業所得はわずかに減少すると見込まれる。

農外所得は、景気が引き続き緩やかな拡大基調で推移するとみられることから前年度と同程度の伸びになると見込まれる。また、出稼ぎ・被贈・年金扶助等の収入は前年度の伸びを上回ると見込まれる。

以上のことから、年度間の農家総所得は2～4%程度の増加と見込まれる。

表-2 農家経済の動向（全国1戸当たり平均）

区 分	59年度 実 額 (千円)	対前年度(同期) 増減(▲)率(%)			
		57年度	58年度	59年度	60年度 (4-9月)
農 業 所 得	1,065.3	▲1.7	4.0	7.6	▲2.2
農業粗収益	2,857.4	0.9	4.5	6.2	0.7
農業経営費	1,792.1	2.5	4.8	5.3	1.5
うち現金支出	1,241.6	0.6	3.9	4.7	▲1.0
農 外 所 得	4,295.5	5.5	3.0	4.0	2.8
給料・俸給	3,353.1	5.1	3.0	3.8	3.6
被用労賃	278.2	▲4.1	▲0.6	0.3	▲1.7
農外事業等の収入	470.6	7.5	5.2	0.5	▲2.1
出稼ぎ・被贈・年金扶助等の収入	1,389.1	9.2	7.9	2.7	11.8
農 家 総 所 得	6,749.9	5.0	4.1	4.2	4.1

7. 海外農産物の動向

1985/86年度の世界の穀物、大豆の需給動向をみると

①小麦については、生産量は、カナダ、ソ連等が増加するとみられているものの、アメリカ、EC、東欧等が減少し、世界全体では史上最高となった前年度をわずかに下回ると見込まれる。また、消費量はアメリカ、中国等で減少するとみられていること等から生産量を下回るとみられ、在庫率も前年度以上になるとみられる。このため、需給は引き続き緩和基調で推移すると見込まれる。

②飼料穀物については、生産量は、アルゼンチン、オーストラリア、EC等が減産となるものの、アメリカが大増産となるほか、カナダ、ソ連等も増産とみられていることからやや増加するとみられる。一方、消費量は、アメリカの増加等からわずかに増加するとみられているものの生産量を下回るとみられる。このため、在庫率も高水準が見込まれ、需給は引き続き緩和基調で推移すると見込まれる。

③大豆については、生産量は、ブラジル、中国等が減産とみられているものの、世界の大豆生産の約6割を占めるアメリカが大増産と見込まれていること等から、前年度をかなりの程度上回ると見込まれる。一方、消費量は、飼料用として大豆かすの需要の増加などからやや増加すると見込まれるものの生産量を下回るとみられ、需給は引き続き緩和基調で推移すると見込まれる。